

触覚と美容 —自我形成についての現象学的研究—

石 田 かおり*

Tactile Sensation and Beauty —A Phenomenological Study on Self Awareness—

Kaori ISHIDA*

Abstract

In my last research paper, it was found that tactile experience is indispensable for the acquisition of the concept of the self. This suggests that tactile sensation might be the most fundamental sense among the five senses. Experiments ranking the superiority of the five senses support the idea that tactile sensation is the most superior. Tactile sensation is not just one of the five senses on par with the other four, but it holds an exceptional position as the most fundamental among them. Tactile sensation is the most basic sense supporting the survival of living organisms. When humans map their bodies and the environment around them, the information obtained from tactile sensation forms the foundation. It is also fundamental for the mental state of humans and child development.

Now, let's consider the most fundamental sense of the beauty act. Makeup and hairstyling are important for their shapes, so it seems that vision is the most important sense. However, both makeup and hairstyling inevitably involve touching the skin and hair and adjusting the finish based on the tactile sensation. Therefore, tactile sensation is also an indispensable and important sense. In skincare, body care, bathing, and similar care actions, tactile sensation is the predominant sense. Additionally, in the early history of beauty, it was closely intertwined with medicine. The persistent belief that "healing hands" is the origin of medicine indicates that tactile sensation is the primary sense in early medical and beauty practices. From these points, it can be said that tactile sensation is the most fundamental sense of beauty.

From a phenomenological perspective, the self is a concept, not an entity. Therefore, the self is always fluctuating and fragile. We feel uneasy if they are not constantly aware of, correcting, updating, and controlling the state of our self. One way to confirm and control the self is through beauty. The fact that tactile sensation is the most fundamental sense of beauty aligns with the conclusion of my last research paper that tactile experience is indispensable for the acquisition

*人間総合学群 人間文化学類

of the self. For humanity, beauty using tactile stimulation is an extremely effective means of acquiring and forming the self. This reveals that beauty is not merely a superficial and trivial act of decorating one's appearance, but its significance is profound.

1 研究の目的と背景

人工知能を搭載したトランスヒューマンとホモサピエンスの認識の比較検討を筆者は2017年から始め、研究の歩みを一連の論文としてほぼ毎年発表し続けてきた。その中で昨2023年は、諸方面の研究成果を援用しながら、生物が自我をどのように獲得するかについて明らかにした。(注1) 結論を一言で表せば、自我の獲得には触覚による経験が不可欠である、ということだ。この研究を中心に、トランスヒューマンとの比較により浮かび上がったホモサピエンスの認識特性についてのこれまでの研究成果と筆者がこれまで別に積み重ねてきた化粧哲学の研究を掛け合わせて、ホモサピエンスが化粧で何を行ってきたのか、化粧の本質を認識論的に明確にする論考をこの論文では行う。できればその論考から新たな社会提案まで至ることができれば、この度の研究は十全な成果を得たと考えている。

この論文を単独で読む読者にとって、上記の研究目的はおそらく唐突で意表を突くものに見えるであろう。そこで、ごく簡単に経緯を記す。学生時代からフッサル現象学の研究をしていた筆者が事情により就職活動をし、1992年に世界最大手の化粧品企業の1つ採用され、2018年12月まで社員として「美の研究」と社内では呼ばれた活動を続けた。採用当時は創業120周年を迎えるときで、その企業が120年間社会にどのような美を発信してきたのか、今後100年企業が存続するためにどのような美を発信し続けるべきかについての研究と、研究成果を企業活動にいかす業務を26年9カ月実施した。この就職と同時に「人はなぜ化粧をするのか」、「化粧という行為で人類は何をしているのか」、「化粧で

求める美とは何か」が業務となったと同時に筆者のライフワークになり、このようにして哲学の方法を応用した化粧・美容の研究は始まった。2018年に企業を辞めたことで研究テーマから「化粧」の縛りが取れたため、潜在的に継続していた就職以前の「元の」研究分野と研究テーマを表面化する方向に舵を切った。背景には、人工知能と人間拡張工学とバイオテクノロジーが社会だけでなく人類そのものを変えるほどの目覚ましい進展が見られたこともある。社会と人類の新たな黎明期にこそ、社会や人類が取るべきでない方向に進まぬよう、最も基本的な問題を明らかにし議論と熟考を迫る役目は哲学にある。それゆえ哲学の徒としてこの局面を放置し沈黙することはできなかったのだ。こうしてトランスヒューマンを手掛かりにした認識論についての一連の研究論文を発表し続けてきた。

このような研究の歩みの中で、近年に至り筆者が年を追うごとに確信が強くなっていることがある。それは、化粧の哲学とAI・トランスヒューマンの哲学の2つは一見無関係に見えるが、実は根が続いていることだ。いずれ2つの研究テーマと、そのほかの筆者の活動もすべて自然に1つにまとまり、それぞれの方面での蓄積が互いに協力関係になり新たな展開に至ることを予見と確信を持つようになった。今回はその第一段階であると考えている。

2 自我の形成と心身二元論

さて、前論は(注1)自我の形成には触覚による自己と他者の区別による認識が不可欠であるという結論であった。触覚は無論身体感覚の1つであるから、身体なくして自我はない、と

同時に、身体なくして他者はない、ということになる。このことは、デカルトの『省察』と『方法序説』を援用するまでもなく、近代、そしてその先の現代に至る地球と人類を覆い尽くす壮大な科学技術文明を築く端緒になった心身二元論、すなわち厳格な心身の分断という社会原理に反する結論である。デカルトの背景に存在する西洋キリスト教、とくにローマカトリックの思想に心身二元論が存在する。精神を高尚なものとして過度に偏重し、その反対に身体を悪の源として卑下し克服すべきものとするこの思想は、現代社会と現代の科学技術の基礎に脈々と流れ続けている。繰り返して確認するが、心身二元論は精神と身体の明確かつ越えがたい分断の思想である。自我や他者という概念は精神的なものであり、それが身体なくして獲得できないということは、心身二元論に明確に対立する考え方である。近代が生んだ自然科学の成果から明らかになったこの結論が、自分を生んだ近代的思想に反することになったというわけだ。もっともデカルトは一度分断を明確にした精神と身体を結び付け、精神から身体という概念が生まれる関係性を再構築しようとその後多大な努力を続けた。しかし多くの批判を受けたように不十分な成果しか上がらず、おそらく本人としては不本意に研究人生を終えることになってしまったのではないかと推察される。

デカルト本人というよりはデカルト的近代科学（科学は自然科学の意味でなく学問の意味）が目指してきたことは、デカルトが試みたような精神から身体を生み出す形の心身二元論で、トランスヒューマンはその典型的なものである。身体を持たずに人類の知と技術の粋を集めて創造する人工人類であるからだ。近現代の科学技術が心身二元論に基づくことを見事に象徴している。ところが、筆者の研究（注2）では、トランスヒューマン（拙論ではホモマキナリウス）

は自我が不要である。すなわち、精神は不要である。心身二元論に基づき精神からすべてを創造した結果、精神が不要になった、それが着地点である。心身二元論そのものが抱える問題はこの着地点からも明白であろう。

これに関連して、ここでぜひ明確にしておくべきことがある。この論文執筆時点の2024年夏、日本を含めた世界では仕事や学習や日常生活に人工知能を活用することが当たり前になり、人工知能が社会的インフラになっている。考えることが面倒でできる限り省略したいと思う傾向がある人間にとって、人工知能は自分で考えなくても結論を出してくれパートナーとして依存されるようになり始めた。心身二元論の原点を振り返れば、肉体的な要素をできる限り減らして精神だけで生きることが目的である。にもかかわらず、心身二元論の極致である精神だけの人工知能が人類の精神活動を抑制する大きな要因になっている。当初の目的に反するという問題もさることながら、人類の今後の存続を考えたときにこのことは極めて大きな問題ではないのか。パスカルは『パンセ』の中で人間が人間たる所以としての人間の尊厳について、有名な「人間は考える葦である」の箇所ですべての大陸に棲息域を拡げ、「人新生」と呼ばれるように地球環境を変えるほどの力を持つようになったのは、思考を重ねて知恵を絞り互いに知恵を出し合い協力し合って来たからではないのか。思考を放棄してしまったら人類は滅亡する。人類の作り出した人工知能が人類

を減ぼすとしたら、よく見る SF のように人工知能が人類に敵対する集団となるからではなく、人工知能に過度に依存するようになり人類が思考を放棄するからではないのか。この問題は本論文の主旨から少し外れるのでここではこれ以上追究せず問題提起にとどめるが、きわめて重大な問題であることだけは指摘しておく。

さて、思考を前に進めよう。身体活動に由来する触覚により自我と他者という概念が獲得されるということは、もし生物の個体が1つしか存在していなかったとしたら、その個体は自我と他者の概念を持つことはないのか。この問いに対する答えは簡単かつ明白である。たとえば個体が前に進む際に何かにぶつかったとする。ぶつかる相手は生物でなく河でも崖でも何でもよい。このような場合、前に進めないから横に進もうとしたり後退したり乗り越えようとしたりするかもしれない。動作は何であれ、ぶつかった相手は自己ではない者だとそのとき判断されれば、その時点で自己と他者の概念を持つ可能性がある。日本語で「他者」と記すと「他の人間」と読めるので誤解が生じやすいが、哲学では「他者」は「他の存在」でそれが人間とは限らないし生物とは限らない。生物が1つしか存在しなくても、地球の環境の中に存在しているならば、そしてそれがいつの時代でも、他者は存在するので、自己と他者の概念を持つ可能性はある。それゆえ前論文の結論に問題はないと言えよう。

3 触覚の特別性

自我と他者という概念の獲得には身体による触覚経験がなければならない。ということは、触覚は五感の中でも最も基本的な感覚とすることができるのではないか。皮膚科医のモンティ・ライマンは次のように述べている。(注4)「じつは、誰かが私たちの皮膚に触れるとき、

その人は私たちの脳にも触れている。というのも、皮膚と脳という二つの器官は、いま自分に触れているものは何か、それに対してどう反応すべきかを見極めようと、絶えず連絡を取り合っているからだ。」こうした皮膚と脳の絶えざる連絡関係は、触覚経験により自我や他者といった概念を得ることと何ら矛盾しないどころか、むしろ援護する研究成果と言える。たとえば人類の場合、生まれてしばらくは視力がほとんどないので、おそらく他の4つの感覚を活用して自分の置かれた状況を察知していると考えられる。味覚は成長過程での経験により形成されていくことを考えれば、触覚・嗅覚・聴覚の3つの感覚が、生まれたばかりの人間にとって極めて重要な感覚情報を得る手段になっていると考えられる。人類の五感には優先順位があることが知られている。優先順位には2種類あり、その1つが優位性による順位づけである。優先順位の高い感覚を活用しているときには下位の感覚を活用しにくくなることで優先順位を知ることができる。この方法により五感の優位性順位を調べた結果、優位な順に触覚、聴覚、視覚、嗅覚・味覚ということが判明している。もう1つの方法は、人類の五感による情報収集能力による順位である。その結果は、視覚87.0%、聴覚7.0%、嗅覚3.5%、触覚1.5%、味覚1.0%という文献もあれば、視覚83.0%、聴覚11.0%、嗅覚3.5%、触覚1.5%、味覚1.0%という結果が掲載されている文献もある。(注5) いずれの結果も順位は同じであり、8割以上の情報を視覚から得て、他の4種の感覚は視覚が遮断されない場合はあまり活用されていない。バーチャルリアリティやメタバースなどの第2の現実を体験できるメディアの開発は、現在までのところ視聴覚に著しく偏ったものであるが、それは五感による情報獲得の割合から納得の行くものである。

視覚がある場合には情報量は少ないが優位性では第1位の触覚について、近年研究書が相次いで刊行されている。海外の著者の邦訳も続々と現れた。それらは最先端の研究成果を一般向けに記したものも多い。主要なものを挙げてみよう。まず触覚研究の古典 E.H. ウェーバーの『触覚』の第2版の邦訳、モンティ・ライマン『皮膚、人間のすべてを語る』、デイヴィッド・J・リンデン『触れることの科学』、梶島健治『人体最強の臓器 皮膚のふしぎ』、山口創『人は皮膚から癒される』、仲谷正史他『脳がゾクゾクする不思議』などである。これら最新の研究成果に共通に見られるのは、触覚は五感の中の単なる1種類で他の4つの感覚に並ぶものという位置づけではなく、五感の中でももっとも基底になる優位性を持つことである。触覚は生物の生存を支える最も基本的な感覚で、人類が自分の身体や自分を取り巻く環境についての地図を描く場合にも触覚から得た情報が基礎になり、人類の心理状態にとっても人類の子供の成長にとっても他の感覚に抜きんできわめて基本的で重要な感覚だということだ。先述のライマンの引用のように、皮膚に触れることは脳に触れることと同じであるという研究成果はその一例である。脳外科医ペンフィールドが作成した有名なホムンクルスの図が示すように、触覚を代表する部位である手足と、次に触覚を代表する部位である口は、感覚野・運動野ともに情報量的に1位と2位を占め、両者合わせて過半数を占めている。このことから触覚が情報の獲得と動作にとって最も重要な感覚であることがわかる。

4 触覚と美容

美容に必要な感覚は五感のうち何だろう。美容は外見を形作ることだから視覚が美容にとって最も重要と言う意味で第一の感覚であろうか。

しかし、そもそもメイクをするにも髪型を作るにも、肌や髪に触れて手作業で指先から伝わる感覚を頼りに行う。美容は手を使う技術である。顔に限らず身体はどこを手入れするにも手を使うし、髪型を作り上げるにも手を使う。手そのものと、手により道具を使いこなして遂行する行為が美容と言える。自分で自分の身体に美容を行う場合、行為の主体は自分の手で、行為の対象は自分の肌や髪である。ファンデーションを顔に塗布する際は行為の主体の手の感覚と同時に行為の対象である顔の肌の感覚から得た情報と、両方の感覚により力加減などの動きを調整するように、行為の主体も触覚、行為の対象も触覚が極めて重要な感覚になっている。たとえば朝起きて一番に顔を洗う際、両手が自分の顔の皮膚に触れたときに、われわれはいつもと同じ皮膚の状態なのか無意識のうちに確認する。もしどこかに吹き出物や肌荒れなどふだんと異なる状態の部分があれば、視覚情報だけでなく、時には視覚以上に指先がいち早く正確に異なる部位を見つけ出し状態を精緻に把握する。髪を梳りヘアブラシやコームが流れて行くときに、ブラシやコームを持つ手は微かな引っかかりも見逃さない。枝毛は鏡で見るよりブラシやコームを使う方が簡単に発見できる。人体最大の臓器である皮膚（髪・爪も皮膚が変形したもの）の異変は、自分の身体の場合、視覚以上に触覚によって微細な点まで見逃さずに気付くことができる。このように考えると、美容にとって第1の感覚は触覚と言うことができる。見た目を整えるために視覚は必要であるし、香りを纏うのも美容、デオドラントも美容であるから、美容は嗅覚も活用する。またコンパクトが閉まる音、リップスティック容器のキャップがはまって固定される音、素手に化粧水をつけて頬にパッティングする音など、聴覚も刺激される。しかし聴覚は常に伴う感覚ではない。コンパク

トやリップスティックなどの容器の音は、音と同時に閉まるあるいははまる感覚も不可欠で、それは触覚である。このように考えると、美容にとって不可欠な感覚は触覚と視覚であり、他の感覚は必要な場合とそうでない場合があると言えよう。

筆者は哲学を応用して美容の研究を始めてから、美容を2種類に分類している。化粧の語源を調査した際、西洋各国語はトイレット系統とコスメティック系統の2つの系統に分けられることが判明した。(注6) 身嗜みを整えることや身体表面の状態をケアするなどの準備段階がトイレット系統で、メイクやヘアスタイリングなどトイレット系統の行為の上に存在する外見を飾ることがコスメティック系統である。この分類を適用すれば、トイレット系統は触覚の活用が圧倒的な割合を占める行為であると言える。マッサージ、スキンケア、ヘアケア、歯磨き、洗顔など、清潔とケアとリラクゼーションが目的の行為は手で触れることと、触れられることの効果を最大に活用するからである。これに対してコスメティック系統は、顔や髪などの見た目の状態をよくすることであるため、触覚と同時に視覚も重要になる。しかしコスメティック系統を実施するにも触覚は不可欠である。メイクをするのも手、髪をカットするのも手、ヘアスタイルを作るのも手、着け睫毛や着け爪を施すのも手であるからだ。

ここまでの考察から、美容にとって最も基本的で第1の感覚は触覚であるという結論にわれわれは到達した。

5 「手当て」という行為—医療と美容の関係

ところで、医療の始まりとしてよく耳や目にする俗説に「手当て説」がある。患部に手を当てて痛みを減じたり治療効果を促進したりすることが医療の始まりだ、という言説である。幼

い頃、痛みを訴えたときに傷む個所に親が優しく手を当ててくれた、あるいは発熱の有無を確認しようと額に手を当ててくれたというような心温まる懐かしい記憶を持つ人も少なくないであろう。昭和の子供から高い人気を獲得したテレビのコメディ番組から「痛い痛い飛んで行け」というまじないが全国に普及した。痛みのある場所に手を当ててこの文句を唱え、「飛んで行け」の箇所ですみずきを放り投げるかのように手を勢いよく離す仕草をする。この言い回しと動作の起源は不明であるが、まじないの言葉と同時に手を当てて離す行動を伴うことに注目すれば、「手当て説」の普及が前提になっていると考えられる。「手当て説」に自然科学的な裏づけはないものの、自分のことを心配してくれる人物や医師・看護師のような治療のプロが手を当ててくれることで本人は痛みが減じたような気になる効果から、患部に手を当てることは一定程度の心理的效果があると言われている。痛みは患部を切り開いて取り出してもそこにあるわけではなく脳的作用であるから、心理的效果のある行為は効果があると確かに言える。「手当て説」が学術的に真かということはさておいて、「手当て説」が普及しているという事実は、医療や治療にとって人の手が欠かせないもので、手を当てられる触覚が医療や治療の最も基本的感覚であることを示していると考えられる。最近の医師はパソコンの画面ばかり見て患者を見るのは一瞬であり、手や聴診器などで患者に触れることは減多になく、患者は治療を受けた気がしない。病名や治療法などの情報は得られて頭では理解しても、見て触ってもらったわけではないから何か物足りないというか腑に落ちない、という内容の話をしばしば聞く。科学的には医師が患者の病を治すのではなく、順調に治療が進むためのアドバイスをするのが医師の役目であるし、昨今はハラスメントに対する警戒や感染

症予防の観点から医師が患者に不必要に触れることは滅多にないが、患者の心情としては医師による触覚という感覚を得られなかったことが物足りなさにつながっていると考えられる。

ここまでのことから、美容にとっても医療・治療にとっても手を当てる触覚がもっとも基本的な感覚であると言えよう。実は歴史をさかのばれば、美容と医療が一体化していた、というより未分化であった時期が多く文化に存在する。人類がいつから美容を始めたかまったくわからない。旧石器時代のようなたいへん古い時代の文献はない。少数の洞窟壁画のような絵画が発見されているが、それらは美容の実態を知る手掛かりにはならない。人骨には美容の痕跡が残らない。このように根拠となる資料がないから皆目見当がつかない。不確かではあるがある程度根拠を持って美容が存在したと言えるのは4大文明が現在のところ最も古い時代である。医療の始まりに関しても美容の状況に近いものがあるが、アルプス山脈でヒトのミイラが発見されたことで一気に歴史をさかのぼることになった。エッツィ（アイスマンとも呼ばれる）という名がつけられた男性のミイラで、彼が生きていたのは紀元前3350から3110年の間と特定されている。身体にはいれずみが61か所あり、いれずみの位置が骨と関節の損傷個所を示しているばかりか、東洋医学が現代まで伝承し活用しているツボと一致していることが判明したことから、損傷の痛みを何かの方法で治療していた可能性がある。ツボを何で刺激していたのかわからないが、ツボは皮膚の上から刺激するので、治療される側は触覚を通じた治療になる。また治療をする側から見ても、手または何かの道具でツボを刺激する際に触覚を通じてツボに刺激を与えることから、触覚による治療がこの当時から存在したと考えられる。

ところで4大文明の美容と医療・治療につい

て振り返ると、たとえば古代エジプトでは『エーベルス・パピルス』や『エドウィン・スミス・パピルス』などから知られるように、手術も実施されており、高度な医療が存在したと考えられている。ミイラの製作方法は、死者の内臓を取り除き、ソーダで洗浄し、薬草を詰め込んで亜麻布で巻く。もっとも腐敗が早い内臓を取り除き細菌の繁殖による死者の身体の分解をできる限り防ごうとソーダ洗浄と薬草を詰めたことから、衛生や薬草についての知識も豊富であったと推測される。西洋文明では古代ローマと同時代になるが、古代エジプト王朝最後の女王クレオパトラは薬草と香料の知識と技術も豊富に持ち、効果的に活用しことが知られている。当時の地政学上の必然性から自国の独立を守るため女王である自分を魅力的に見せる演出をする際にもその知識を活用したばかりか、健康の維持・増進にも利用していたと言われる。古代エジプト文明・古代ギリシャ文明・古代ローマ文明は西洋文明の黎明期だが、いずれも薬草の芳香による療法、現代で言えばアロマセラピーが存在していた。現代のアロマセラピーの目的は心身の健康効果と同時に美容効果も兼ねているが、古代文明でもその点は同様であった。

西洋文明ではその後薬草の知識と技術は民間伝承医療とその担い手により継承されて現代まで続く。それは、古代ギリシャの医学者ヒポクラテスを神のように仰ぎ、古代ローマを経て中世、13世紀世界最古の医学部と言われるサレルノ大学(医学校)に端を発する西洋医学とはまったく別の系譜をたどって行く。中世からルネッサンスにかけてしばしば魔女狩りがあった。魔女として迫害・殺害の対象になった女性たちの多くは、薬草の知識を活用して人々の心身の健康上の悩みを解決し食生活も豊かにする、生活の知恵を伝授する人であった。(注7) ごく一部には魔女と正反対に、宗教界から一目置かれ

修道院長に任じられ、人々からも聖女と崇められたヒルデガルド・フォン・ビンゲンのような薬草を操る人物も存在した。ヒルデガルドはドイツ薬学の祖やホリスティック医学の祖とも言われ、薬草についての書物が20世紀ドイツの人々に広く読まれた「ヒルデガルド・ルネッサンス」と呼ばれる流行現象もあった。アカデミズムの「正統派」の西洋医学は内科学が中心で、近世まで外科は床屋の領域であった。瀉血や手術により血液を見る外科を担う床屋は徒弟制で、欧州中を彷徨しながらさまざまな親方の下で経験を積み、その挙句に自身が親方になる職人で、学問の結果医師になり人々から尊敬を受ける大学出の医師とは完全に別世界の住人だった。このように長い間西洋では触覚を用いた医療は床屋や魔女たちが担い手であった。心身二元論を生んだ、すなわち精神を偏重し身体（肉体）を蔑視した西洋文明ならではの歴史である。

ところで古代ギリシャの学者ディオコリデスは『薬物誌』を記したことで、現在でも西洋薬学の祖と言われる。『薬物誌』は後に古代ローマのプリニウスが『博物誌』を記したことで形が整う博物学の一種という位置づけで、はるか後のカール・フォン・リンネの『博物学』につながる。すなわち現代では生物分類学と呼ばれる分野に行き着く。学問としての薬学は西洋では18世紀、折しも産業革命により都市に労働者が集中し、第一次産業から第二次産業に産業の中心が移行する頃まで待たねばならない。魔女のような民間伝承の薬草の知識・技術と異なる歴史がある。博物学も生物分類学も触覚より視覚が中心になる分野である。触覚による医療と美容を担ってきたのは民間伝承の方である。

ここで東洋文明に目を転じてみよう。黄河文明でも鉛白粉や紅花が原料の紅など、化粧に使われたと思われる物質が出土していることから、早くから美容が発達していたと推測される。医

療もおそらく同様であったろう。秦の始皇帝の時代から最後の王朝である清まで、中国のトップは不老不死を追求し続けてきた。不老不死の追究は道教の中でも錬丹術として伝承と研究と実践が重ねられてきた。錬丹術は不老不死の結果仙人になることを目的とする術である。仙人というと白髪と白くて長い顎鬚の相当高齢の男性のイメージが存在するが、それは日本でのことである。不老不死であるから仙人は永遠の少女である。現代で言えば「美魔女」が近いのかもしれない。錬丹術は主として薬草（鉱物も利用する）と身体技法により健康を維持し、不老と不死を追求した。後の本草学、さらに後の時代の中医学に連なる中国伝統の医学兼薬学の系譜は、初期段階では錬丹術と混然一体であった。西洋の自然科学（とくに化学）が中世には錬金術と混然一体であったのに似ている。

中国の本草学は日本にも伝わり、日本の中で独自の発展を遂げて、西洋化が進む以前の江戸時代までは日本の医学兼薬学の主流であった。日本でも縄文時代から薬草の技術が存在していたのかもしれないが、現在までのところ発掘された資料がないのでまったくわからない。医学兼薬学と美容について記された最も古い文献は、平安時代の御殿医丹波康頼が記して984年に花山天皇に献上した『医心方』である。『医心方』という題名から医学書に思われる。確かにそうであるが、内容を見れば美容についても記されている。（注8）巻4（第14-23）には毛髪、頭部、顔面の諸疾患や治療法が詳細に記されている。そこには肌荒れ・シミ・ソバカスができる仕組みが記され、ソバカス・アザ・ホクロ・肌の黒ずみ・ニキビ・ナマズ肌の治療法と傷や皮膚病の跡を消す方法について、植物や食品を使って行う方法が記されている。また、巻4（第1-11）では、理想の毛髪状態について記され、その後に頭髪の悩みに対する解決法が記されて

いる。理想の毛髪は長く光沢と弾力がある髪である。悩みの解決には、白髪を黒くする方法、黄ばんだ髪を治す方法、脱毛、白禿、円形脱毛症についての治療法が記載されている。また眉の脱毛についても記されている。これらの中には現代でも通用する効果的な処方もある。こうしたことから平安時代は美容が医学の一部として健康の維持に欠かせないものと位置付けられていたと考えられる。

『医心方』の美容に関する記載を見ると、江戸時代後半の化政文化華やかかなりし頃に上梓された『女子愛嬌都風俗化粧伝』（以後『化粧伝』と略記する）が美容部分の直系の末裔であると考えられる。『化粧伝』は文化年間の1813年が初版で、1923年の関東大震災で版木が燃えて刷り続けることが不可能になるまで、江戸・明治・大正と3つの時代110年間刷り続けられた世界的にも稀な書物である。さらに、美容に特化した書物としても、3つの時代の女性たちの多くが内容を知っていたと思われる点でも世界に類を見ない書物である。『化粧伝』に記された肌・髪・その他の美容に関する悩みを解決する方法の多くが本草学の知識と技術を用いたものである。野草の薬草を自分で取りに行くか薬店で購入するという2つの薬草入手方法が記され、それに続いて生薬を使った悩み解決のための化粧品でもあり医薬品でもあるものの制作方法が多数記載されている。白粉の作り方や紅の点け方といったメイク法や歩き方や目線などの身体技法などは本草学と無関係だが、身体の表面を美しく保つ方法は本草学に由来するものが圧倒的に多く、近代に至るまでの日本では医学兼薬学と美容はかなりの程度一体化していたと言える。

日本では、明治時代の近代化政策に則って西洋薬学に基づく調剤薬局の創業が始まった。もっとも早く創業したのが資生堂で（明治5年、1872年）、当初は調剤薬局だけの事業であったが、

明治時代後半に（明治30年、1897年）に西洋調剤処方をいかした化粧品「オイデルミン」の発売を機に化粧品事業に乗り出した。西洋薬学とそれをいかした化粧品という関係が日本の西洋化粧品の始まりになった背景には、江戸時代までの医学兼薬学と美容の一体化が存在すると考えられる。「オイデルミン」が発売された当時は『化粧伝』が読み続けられた時代に含まれているので、これはごく自然なことと言えよう。

現在は一般的には医学・薬学と美容は全く別の分野と考えられている。しかし化粧品の処方についての香粧品学を学修できる大学の薬学部は数多く存在するし、化粧品を製造するための研究員として化粧品会社に就職する薬学修士も数多く存在する。化粧品を施すもっとも代表的な部位である皮膚を健康で美しい状態に保つための学問は医学部の皮膚科専門課程である。このように考えれば、医学・薬学と美容は切り離せない関係にある。よく「美と健康」と言われるが、その言説は正鵠を射た表現であると言える。

医療は手当てが原型であるという俗説が根強いことは既に確認した。では、美容と手当ての関係はいかがだろうか。4触覚と美容で見たように、美容にとって触れるという触覚がもっとも基本的な感覚である。何に触れるかと言えば、肌・髪・爪など人体の表面である。美容液やクリームを自分の肌に塗るときは両手で自分の顔に触れる。顔を包み込むようにする動作をする場合もある。メイクは道具を使って肌に触れることが多いが、アイシャドーを指で着けたり口紅を指で着けることもある。コンシーラーを使う時には、コンシーラーの着いた指先でコンシーラーを着けたい箇所の肌をごく軽く叩くようにすることがよくある。自分の顔に触れる場合は肌のコンディションが指先や手のひらから伝わって自覚されるし、プロにメイクしてもら

うときはプロの力加減や腕前が肌から伝わることがある。自分にせよ他人にせよ、人と人の触れ合いがそこにあり、手当ての存在が認められる。医療と美容は「手当て」という人と人の関係が基本にあり、そこには触覚が大きな役目を果たしているということが確認できた。

6 0番目の脳—皮膚の働き

1個の受精卵が分割することでやがて1個の人間が形成される発生の初期段階に、内胚葉、中胚葉、外胚葉の3種が形成される時点がある。内胚葉から消化器・呼吸器・尿路が形成され、中胚葉から骨格系・筋系・循環系・泌尿生殖系が形成され、外胚葉から皮膚・神経系・感覚器が形成される。このように皮膚と脳・神経は同じ由来で、外胚葉は脳神経組織の元であるため、皮膚は「0番目の脳」とも言われる。皮膚は脳が人体の表面に出てきて作ったいわば出張拠点のようなものと言える。

皮膚と脳の関係については次のようなことも判明している。近年「脳腸相関」という言葉をよく見かけるようになった。腸内の状態が脳に影響を及ぼすことが判明したからである。この言葉を借りれば、発生からして「脳皮膚相関」と言うことができる。腸内環境が悪く重い疾患を持つ患者に腸内環境がよく健康な人の腸内細菌叢を移植する便移植という治療法が存在する。これに似て重いアトピー性皮膚炎の治療に皮膚常在菌移植が効果的であることがわかっている。近年では人間の皮膚に常在する真菌の一種であるマラセチア菌に注目した興味深い研究もある。マラセチア菌が他の微生物とバランスを取って皮膚表面に存在している間は問題が生じないが、バランスが崩れてマラセチア菌が異常に繁殖すると皮膚トラブルを引き起こすことがある。代表的な例が脂漏性皮膚炎、アトピー性皮膚炎、マラセチア毛包炎などである。マラセチア菌は

皮膚だけでなく腸内にも存在し、腸内環境の乱れが、皮膚疾患の悪化につながる可能性が指摘されている。いわば「皮膚腸相関」の関係にある。ここまでは臨床で実施されていることだが、研究の段階ではマラセチア菌と脳疾患の関連性が注目されている。皮膚科が専門の大塚篤司によると（注9）、アルツハイマー病やパーキンソン病、多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症などの神経変性疾患の患者の脳組織からマラセチア菌のDNAが検出された。またマラセチア菌は腸内環境にも影響を与え、腸内のマラセチア菌が増加すると炎症性サイトカインの産生が促進され、腸管バリア機能が低下する。これにより、病原体や有害物質が体内に侵入しやすくなり、脳の健康にも悪影響を及ぼす可能性がある。高齢化に伴い日本でも神経変性疾患の患者数が増加しているので、マラセチア菌と脳や神経性疾患の関連性を解明必要があると指摘している。中高年のアトピー性皮膚炎が認知機能障害、特にアルツハイマー型認知症および全ての認知症のリスク上昇と関連すると考えられるという研究や臨床調査結果も存在する。（注10）このように健康の点でも皮膚と脳が強い相関関係にある。

皮膚は人間の体全体を覆い、面積は約1.6㎡、およそ畳1畳分である。毛穴のような窪みも入れた総面積は25㎡、畳15畳分で、体重の約16%を占めている。このような皮膚の面積と重さから皮膚は「人体最大の臓器」とも呼ばれる。皮膚は全体が外界に直接接しているため、病原体や物理・化学的刺激から体を守り、圧力や温度などを感じる感覚器としての役目も果たす。体の水分の損失を防ぐと同時に外からの水分の透過も防ぐ。病原体や有害物質から体を守る免疫機関としての役目も担うし、体温を調整する。このように皮膚は人間の生命を維持するのに欠かせない多くの機能を持っている。皮膚がなけ

れば人間は生きることができない。火傷で皮膚の機能が失われるので、一般に体表の30%を超える面積の火傷は「広範囲熱傷」または「重度熱傷」と医学で呼ばれ、免疫システムや各臓器の全身障害となる致命的な火傷である。

人間の免疫には自然免疫と獲得免疫がある。自然免疫とは、細菌やウィルスなどの抗原が体内に侵入した際、もともと体内にある免疫細胞が抗原を非自己と認識して攻撃することである。獲得免疫とは、同じ種類の抗原が再び体内に侵入した際、前回の侵入を記憶している免疫細胞が反応してそれを攻撃することである。皮膚の免疫機能は自然免疫である。皮膚は物理的に外界から人体を守る意味で第一のバリアであるが、免疫は第二のバリアと言われるので、皮膚は第二のバリアの役目も担っている。また、免疫は自己と非自己を見分けることで発動する自己防衛システムである。自己と非自己を見分けるには触覚が欠かせないというところからこの論文の考察が始まったことを振り返ると、免疫という点でも皮膚が再び主役として登場することで、皮膚を通じた触覚が生命の生存という点でも人間にとって最も根本的なものであることを再確認することになった。

7 自我の形成と美容

この考察の最後に、皮膚に対して行う化粧・美容という行為を、筆者の専門である現象学の観点からとらえた結果、美容が自我の形成に果たす役割を確認しよう。

最初に現象学について専門家からは粗雑に過ぎると批判を浴びるほど極めて簡潔に説明すると、次のようになる。先に断っておくが、ここではフッサールの用語の説明は逐一せず前提事項として使用する。現象学は本質直観により対象をとらえて、そこに立ち現れる意味付与をただひたすら記述するにとどめる。本質直観を用

いてそこに立ち現れる現象の意味付与の状態を見出すことは、現象学的還元と呼ばれる。現象学が登場するまで実体と見做されて来たものは、現象学的還元の結果実体ではなくなり、実体という意味を与えられた現象がそこにあるに過ぎないということになる。このように実体を措定しないことが、現象についての学「現象学」を名乗る由来になっている。さて自我に対して現象学的還元をすると、自我は実体ではなくなり、自我という意味を自分自身が与えているものにすぎない。それはいわば像 (image) である。像であるゆえ常に揺れ動き、変化し、不安定極まりないものと言うことができる。自我という意味を与えるための素材は、たとえば鏡に映った自分の身体的イメージや、生まれてから今日に至るまでの自分自身についての記憶（これも像である）、親を始めとする知己にたとえば「あなたはこういう人だ」と言われたような他の人から得た自分自身のイメージなど、挙げればきりが無いが、諸々の自我像 (self image) である。自我像を構成する最大の要素は自分についての物語記憶と鏡像や映像など自分の物理的 (physical は物理的と身体的の2つの意味がある) な像である。記憶は容易に塗り替えられることが研究でも判明しており、物理的像もまた日々刻々変化する。物理的像の変化は対象物 (自分の外見) が日々刻々変化するだけでなく、それを見る自分自身の目 (捉え方) もまた常に変化している。気分が落ち込んでいるときにふと鏡に映った自分の顔を見て、気分の落ち込みを再確認する場合、実際に落ち込んだ顔が映っているだけでなく、落ち込んでいると自覚している心理状態で鏡像を見ることで、落ち込みの確認がより確固たるものになる。自分自身を捉える際、対象物の状態だけでなく、対象を捉える側の状態 (メルロ＝ポンティの「まなざし」) もまた像がどのようなものになるかを左右する

大きな要因である。こうしたことから自我という概念は、現象学的観点からすれば、常に変化を続けて定まらない像である。自我がこうに不安定極まりないものであることは、直視すれば大きな不安をもたらす。それは、安定しない限り何もできなくなるほどの威力を持つ不安である。それゆえ人類は常に自我を確固たるものにしようとあれこれ試み、自我を自己確認できると安心する。自己確認の方法は枚挙し切れないほど多様である。動物行動学者デズモンド・モリスの『ふれあい』には自我を自己確認し自我像をコントロールしようとする人類のさまざまな行動が詳細に記されている。一例を挙げると、ふと暇を感じたときに必ず煙草を吸ったりガムを噛んだりしてしまう、心身が疲れ切って何もしたくないときに全身が埋もれるほど柔らかいソファや寝具に包まれると安堵の気持ちになる、などがある。筆者がモリスと対談したとき（注11）、モリスは自宅の温水プールを案内してくれた。指先を水に入れてみたら水温は体温より少し高かった。疲れたときにここに浮かぶとリラックスしてストレス解消になるとモリスは言っていた。これもまた体温と温水の間の温度差を全身の皮膚で感じ、同時に水圧を感じることで自分の輪郭を確認できる効果により、自画像を確認できる装置である。入浴のリラクゼーション効果については少なからぬ研究が存在するが、現象学的な効果説明は未見である。入浴時には湯を貯めた浴槽に浸かる行為とシャワーを浴びる行為、洗浄料などを使って洗う行為がある。浸かる行為はモリスのプールと同じく体温と水温の温度差と水圧により全身の輪郭を確認することになる。シャワーを浴びる行為は、シャワーから出る湯や水と体温の温度差と湯水の刺激により全身の皮膚感覚が活性化し、輪郭が意識される。洗う行為は洗浄料を付けた手などで全身の皮膚に触れることで自

分自身の輪郭を意識し、自我像を自覚できる。これらのいずれもが自我像を得られるため安心やリラクゼーションにつながる。

美容は自分で自分の顔や体に、あるいは美容師などのプロが自分の頭皮や顔や体に触れるため、触覚刺激により自分の輪郭が意識されて自画像を確認し、安心感を得ることができる。とくに触れる主体と触れられる客体が同一のセルフ美容行為は、美容行為を適切に行おうという意図を持ち適切な動作をコントロールする覚醒した意識と、触れられた感覚に浸ろうとする感覚の双方を両立させることが困難で、意識と感覚の分裂に陥りがちである。その点プロなどの他人による美容は、触れられる立場に専念できるゆえ感覚に没入できる。実際、他人に行ってもらう方がリラクゼーション効果の高いことが研究から判明している。美容師にシャンプーしてもらう方が自分でシャンプーする以上に気持ちよく感じられたり、エステティシヤンの施術によりリラクセスが過ぎて眠ってしまうことが多々あるのもこうした理由である。前述したトイレット系統とコスメティック系統の美容の2分を使えば、とくにトイレット系統の美容にプロによる施術で高いリラクゼーション効果が見られる。だれかに触れられることで心身の状態がよくなる効果は看護や介護にも応用されている。それ以外にも、災害を受けた人々が身を寄せる避難所にプロがボランティアに出向いてハンドマッサージをしたり、家族で避難した被災者どうしが互いにマッサージし合ったりすることで、ストレスの軽減効果が報告されている。また、ベビーマッサージも普及しているが、赤ちゃんのストレス軽減と健康効果だけでなく、実施する親の方にもストレス軽減と赤ちゃんに対する愛情を深める効果が見られる。タッピングタッチの普及促進を目的とした社団法人も設立され、活動を行っているなど、触覚による刺

激を活用して心身の状態を向上する方法がさまざまな場面に広まっている。

美容による触覚刺激は不安定極まりない像である自我を自己確認する機会であり、その効果は大きいことがわかった。このように美容は自我の保全と形成にとって身近に存在し、かつ手軽に実施できる、効果の大きい行為である。人類が文化的生活を始めた当初からおそらく美容が始まり、戦争や災害その他さまざまな生存と生活を脅かす状況に遭っても今日まで人類が存在するところなら至る所で続けられてきたのは、自我を維持創造するために美容が必要であるからだと考えられる。マズローの欲求5段階説を使えば、美容の位置づけは次のようなものが一般的な常識とされている。第1段階の生理的欲求に美容は必要なものではなく、第2段階の安全の欲求にも必要ではない。第3段階の社会的欲求からよい容貌を求めて美容に意義が生じ、第4段階の承認欲求と第5段階の自己実現欲求の最上位2つの欲求に美容は応えるものだ。美容は「美しい容貌」と記すことから（英語では beauty であることから）生存や安全という5段階ピラミッド図の下段の欲求がすべて満たされた上で初めて登場するものとされている。すなわち生きるために必死の段階では美容は視野の外にあり、生きるための必要条件が満たされて余裕が生じたとき初めて美容が現れるという考え方が、世間の実態である。生きるために美容は必要のないもので、美容はプラスアルファのおまけのようなものだ。こうした意識が世間に共有されているため、近年の新型コロナウイルスのパンデミックによる行動制限の時期に美容サロンやエステティックサロンに行く人が非難されたり、部活動の規則や学校の校則に髪の色や形に天然無加工の地毛以外を認めない項目があったり、眉の形を変えたりメイクをすることを禁じるなど、美容を感じる行為を禁止する

項目がよく見られる。近年になってオリンピックに出場するようなトップアスリートが、性別を問わず美容を取り入れてパフォーマンスの向上につなげることが見られるようになったことで、学校における美容の制約がいくらか減じた面もあるが、日本の多くの学校ではいまだに美容は勉学や部活動に不要、あるいは妨げになるものと位置付けられて、議論や精査もなく一義的に禁止する傾向が強い。

しかしここまでの考察で美容が自我の維持創造に不可欠かつ大きな効果があると分かったいま、美容はマズローの5段階の中段から上部だけに限る「生きるために不要なおまけ」でなく、5段階のすべての欲求に応えることができるものであることがわかる。いいや、自我は5段階のさらに下、地下に存在する見えない土台と位置付けることができる。5段階を支える土台としての自我の形成と存続の欲求に美容は応えるものであると言った方が正確だ。筆者が世界最大手の化粧品企業と出会い、哲学の方法を使って美容の研究を始めたばかりのとき、部門長から出された課題がある。それは、哲学の理論を使って美容を研究し、しかもどこにどう哲学の理論が使われたかわかるように示しながら、10か月あまり後に開催される社内研究発表会でその成果を発表することだ。筆者はハイデガーの『存在と時間』の、現存在の平均的日常的存在様態について記した部分を用いて、OLの1日生活の中にある美容行為とその行為の時の意識を物語形式に仕立てて、ハイデガーの概念を使って説明した。この研究から明らかになったことは、美容は人間にとって根本的なもの（radical）で、人間の存在に根ざしていることだった。（注12）今回の研究で触覚から美容をとらえて考察を進めた結果、ハイデガーを用いたときはまた別の角度から、いま再び美容が人類にとって自我の形成と存続に重大かつ不可

欠な役目を果たすことが明らかになった。こうして人類が生きること（存在すること）にとって美容は重大なものであることが確認できたことから、哲学の分野で哲学の方法を用いて美容を研究することも必要な研究であると考えられる。しかしそうした例が筆者の研究の他に見られないことは誠に残念である。美容は哲学が研究対象にするに値するものであり、哲学というそれまでになかった視点から美容を捉えることで、改めて美容の意味や価値を明らかにすることができる。人類の幸福のために美容の可能性を掘り立てるために、美容について哲学を含めた各方面からの真剣な研究は今後も続けなければならない。

注

- 1 次の論文を指す。石田かおり「身体の観点を取り入れたヒューマノイドとホモサピエンスの 自己認識に関する考察」、『駒沢女子大学研究紀要第30号』, 2023年, pp.65 ~ 78
 - 2 次の論文を指す。石田かおり「自我の解消」、『駒沢女子大学研究紀要第25号』, 駒沢女子大学, 2018年, pp.39 ~ 50
 - 3 ブレーズ・パスカル著, 田辺保訳『パンセ』, 教文館, 2013年, 159ページ, 断章番号200
 - 4 モンティ・ライマン, 塩崎香織訳『皮膚、人間のすべてを語る』みすず書房, p.142
 - 5 この部分は次のような資料を参照した。教育機器編集委員会編『産業教育機器システム便覧』日科技連出版社, 1972年、照明学会編『屋内照明のガイド』, 電気書院. 1978年
 - 6 詳細は次を参照。石田かおり『おしゃれの哲学』理想社, 1995年, pp.222 ~ 224
 - 7 魔女がどのような存在であっかは主として次の文献に依拠する。西村佑子『魔女の薬草学』山と溪谷社, 2006年
 - 8 ここからの『医心方』についての記載は次の資料に依拠する。丹波康頼撰, 槇佐知子全訳詳解『医心方〈巻4〉美容篇』筑摩書房, 1997年。またこれに続く箇所は次の資料も参照した。槇佐知子『医心方にみる美容』, ポーラ文化研究所, 1983年、佐山半七丸, 高橋雅夫校注『女子愛嬌都風俗化粧伝』, 平凡社, 1982年。
 - 9 この内容については現在までのところ論文の存在が確認できていないため、止む無く大塚篤史氏の取材言説を根拠とした。ヤフーニュースエキスパート「【皮膚と脳の意外な関係】 マラセチア菌がアルツハイマーのカギを握る?」大塚篤司, 2024年 8 月 9 日閲覧
<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/9952b6d3559a6d6b9b5d9a5689c97cbea883a472>
 - 10 「nature2015」東京都医学総合研究所, 2024年 8 月 9 日閲覧
<https://www.igakuken.or.jp/r-info/covid-19-info194.html> 2024年 8 月 9 日閲覧
 - 11 次の対談本を参照。デズモンド・モリス, 石田かおり『「裸のサル」は化粧好き』求龍堂, 1999年
 - 12 資生堂ビューティーサイエンス研究所編『化粧心理学』フレグランスジャーナル社, 1993年, pp.281 ~ 289
- 注に記しきれなかった参考文献（日本語表記で著者五十音順）
- エルンスト・ハインリヒ・ウェーバー『触覚』, 田崎権一訳, ナカニシヤ出版 2023年
木本明恵『はじめてのタクティールケア』, 日本看護協会出版会, 2016年

梶島健治『人体最強の臓器 皮膚のふしぎ』,
講談社, 2022年
砂川融『手に映る脳, 脳を宿す手』, 医学書院,
2020年
田崎權一『触覚の心理学』, ナカニシヤ出版,
2017年
デイヴィッド・J・リンデン『触れることの科学』,
岩坂彰, 河出書房新社(文庫) 2019年
デズモンド・モリス『ふれあい』, 石川弘義訳,
平凡社, 1993年
傳田光博『第三の脳』, 朝日出版, 2007年
傳田光博『皮膚は考える』, 岩波書店, 2020年
傳田光博『皮膚感覚と人間の心』, 新潮社,
2013年
傳田光博『皮膚はすごい』, 岩波書店, 2019年
仲谷正史『触楽入門』, 朝日出版, 2016年
仲谷正史『触覚を創る』, 岩波書店, 2016年
渡邊淳司『情報を生み出す触覚の知性』, 化学
同人, 2012年
本田哲也『今と未来がかかる皮膚の科学』, ナッ
メ社, 2024年
ヤエル・アドラー『皮膚の秘密』, 岡本朋子訳,
ソシム, 2021年
山口創『子供の脳は肌にある』, 光文社, 2004
年
山口創『皮膚感覚の不思議』, 講談社, 2006年
山口創『皮膚という脳』, 東京書籍, 2010年
山口創『手の治癒力』, 草思社, 2018年
山口創『人は皮膚から癒される』, 草思社,
2022年

